

# 植生浄化実証実験について



## 1. 目的

- ◇過年度に検討した植生浄化手法（植生浮島方式）について洗足池において実証実験を実施する。
- ◇実証実験は、植生浄化手法の先行導入として、植生浮島の設置・管理、植物の生育状況の確認、水質および景観への影響の把握等を行い、今後の本格導入や維持管理方針の検討に必要な基礎データを得ることを目的とする。

## 2. 実施期間

- ◇令和8年5月～12月を想定。植物の生育状況や季節変化（生育期・冬枯れ期）を含めて確認できる期間を設定する。
- ◇必要に応じて、途中経過の確認や簡易的な補修・調整を行う。
- ◇植生浮島等の設置にあたり文化財の現状変更等の手続きを行う。

## 3. 実施箇所

- ◇実施場所は、洗足池の南側（＝中原街道側）とする。（図1）
- ◇周辺利用や景観への影響を考慮し、管理・観察が行いやすい水際部に設置する。
- ◇既存の植生や利用動線に支障を与えない位置を選定する。

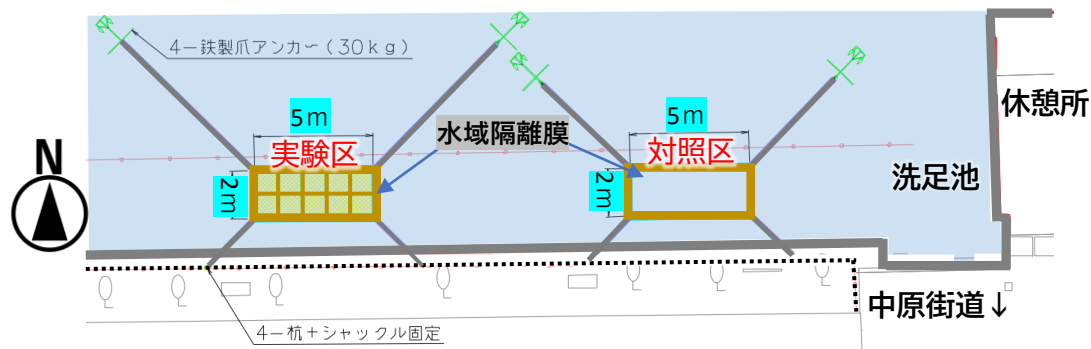


図2 実験区、対照区の配置

## 4. 実施方法

- ◇水面に植生浮島（植生マット）を設置し、抽水植物（マコモ）を植栽する。
  - ◇浮島は係留により固定し、水位変動に合わせて上下動する構造とする。
  - ◇実施期間中は、以下の項目について観察・記録を行う。
    - ・植物の生育状況（生育、冬枯れ、再生）
    - ・水質の変化（目視、現地計測、採水・分析）
  - ◇水質分析は、以下の項目について行う。
    - 化学的酸素要求量（COD）、浮遊物質（SS）、全窒素（T-N）、全リン（T-P）、無機態窒素（硝酸態窒素、亜硝酸態窒素、アンモニア態窒素）、無機態リン（リン酸態リン）、クロロフィルα
- ※採水時に、水温、溶存酸素量(DO)の現地測定を実施する。



図1 植生浄化実証実験の実施箇所



写真1 マコモの景観(洗足池、2025年9月撮影)

表1 水質分析項目と評価の視点

分析項目	単位	評価の視点
化学的酸素要求量 (COD)	mg/l	水中に含まれる有機物量の指標であり、値が高いほど有機物汚濁が進行していることを示す。底質の還元化や悪臭発生の要因ともなる。
浮遊物質 (SS)	mg/l	水中に懸濁している土砂や有機物の量を示し、水の濁りや透明度の低下に直接関係する。
全窒素 (T-N)、全リン (T-P)	mg/l	窒素およびリンの有機態・無機態を含めた総量を示す指標であり、値が高い場合は植物プランクトンの増殖を助長し、水の濁りや富栄養化の進行につながる。
無機態窒素、無機態リン	mg/l	植物プランクトンが直接利用可能な栄養塩であり、濃度が高いと短期間での急激な増殖を招きやすい。
クロロフィルα	mg/l	植物の光合成に必要な色素で、水中のアオコなど植物プランクトン量の目安となり、多いほど高い値を示す。